



日産化学株式会社

2024年3月期 第1四半期決算説明電話会議

説明者

取締役 専務執行役員 CFO 大門秀樹

2023年8月10日

大門：日産化学の大門でございます。本日は、皆様、ご多忙のところご参加いただきまして、ありがとうございます。

それでは、説明を始めさせていただきます。

2023年度1Q決算サマリー



1Q

業績予想比

(2023年5月発表予想との比較)

- 売上高は、1億円上ぶれ
- 営業利益は、5億円上ぶれ
- 純利益は、13億円上ぶれ

1Q

前年同期比

- 売上高は、34億円減収(−6%)
- 営業利益は、23億円減益(−13%)
- 純利益は、17億円減益(−12%)

株主還元の状況

- 自己株式取得 50億円完了(2023年5~6月、805千株)

業績予想

- 上期及び通期の業績予想は、2023年5月15日発表より変更なし

| 4

資料の4ページでございます。23年度1Qの決算サマリーということで、まず一番冒頭には、この5月に発表いたしました年初の業績予想との比較でございますが、売上高は1億円の上ぶれ、営業利益は5億円の上ぶれ、プラス3%ございました。また、純利益につきましては13億円の上ぶれ、プラス12%でございます。具体的な数字は後ほどご説明いたします。

続きまして、前年同期比でございますが、売上高で言いますと34億円の減収、マイナス6%、営業利益は23億円の減益、マイナス13%、また純利益は17億円の減益、マイナス12%でございます。

特に昨年度の第1Qにつきましては、大きく伸びた四半期でございます。その22年度は、21年度対比では営業利益で54億円増益、また率に直しますとプラス45%という時期でありまして、その比較ではこのような数字でございます。

株主還元のご状況でございますが、既にリリースとおり、自己株式の取得につきましては6月をもちまして80万株強、50億円の取得を完了しております。

なお、この上期及び通期の業績予想は5月15日の前回発表から変更ございません。

2023年度1Q決算サマリー 業績予想比



(億円)

	2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
売上高	548	549	+1
営業利益	145	150	+5
営業外損益	7	20	+13
為替差損益	0	15	+15
経常利益	152	170	+18
特別損益	0	0	0
純利益 ^{※1}	109	122	+13
EBITDA ^{※2}	-	178	-
EPS(円/株)	-	87.40	-
売上高営業利益率	26.5%	27.3%	+0.8pt
為替レート(円/ドル)	128	137	-
原油(JCC)(ドル/bbl) ^{※3}	92	84	-

※1 純利益は、親会社株主に帰属する純利益を指す

※2 EBITDA = 営業利益 + 減価償却費

※3 実績は財務省貿易統計ベース

| 5

続きまして、5ページでございます。具体的な数字ということで、まず5月発表の業績予想比となりますが、真ん中の列、23年度1Q実績をご覧ください。売上高549億円、営業利益は150億円、ここが業績予想比ではプラス5億円ございました。

それから営業外損益、これは20億円で、業績予想比ではプラス13億円、うち記載のとおり為替差損益、ここの為替差益が約15億円出ております。

経常利益は170億円でプラス18億円、特別損益につきましてはゼロでございますので、当期純利益は122億円でございます、プラス13億円、12%の予想対比の上ぶれになります。

また、諸元でございますが、下から2行目為替レート、これは137円がこの第1Qの平均値でございます。予算では128円になっておりました。

一方で原油 JCC でございますが、バレル当たり 84 ドルでございますので、ここは少し数字としては下がっており、調達コストとしては減になっております。ただ、業績へ影響が出るまでにはタイムラグ等はございます。

2023年度1Q決算サマリー 前年同期比



(億円)

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
売上高	583	549	-34 (-6%)
営業利益	173	150	-23 (-13%)
営業外損益	22	20	-2
為替差損益	17	15	-2
経常利益	195	170	-25 (-13%)
特別損益	0	0	0
純利益※1	139	122	-17 (-12%)
EBITDA※2	197	178	-19
EPS(円/株)	98.13	87.40	-10.73
売上高営業利益率	29.6%	27.3%	-2.3pt
為替レート(円/ドル)	130	137	-
原油(JCC)(ドル/bbl)※3	111	84	-

※1 純利益は、親会社株主に帰属する純利益を指す

※2 EBITDA = 営業利益 + 減価償却費

※3 実績は財務省貿易統計ベース

| 6

次の6ページ、こちらは同じ1Q決算の前年同期比でございますが、数字は先ほど申し上げましたので、後ほどご覧ください。

		2023年度 実績	業績予想	業績予想比	2022年度 実績	前年同期比
		150 億円	145 億円	+5 億円	173 億円	-23 億円(-13%)
1Q	化学品	業績予想比 予想通り				
		前年同期比 -8億円			メラミン(終売)・テビックの減収、原燃料高	
	機能性材料	業績予想比 1億円下ぶれ			ディスプレイ上ぶれも、半導体下ぶれ	
		前年同期比 -14億円			半導体の減収、固定費増加	
	農業化学品	業績予想比 予想通り			主要品目の販売下ぶれも、固定費下ぶれ(増益要因)により利益予想通り	
		前年同期比 -2億円			フルララネル原薬の減収	
	ヘルスケア	業績予想比 1億円上ぶれ			ファインテックの上ぶれ	
		前年同期比 +3億円			ファインテックの増収	

| 7

続きまして7ページでございます。いつものとおりセグメントごとの営業利益の増減分析でございます。

上から、まず業績予想比でプラス5億円、それから前年同期比ではマイナス23億円でございますが、まず化学品でございます。業績予想比では予想どおりでございましたが、前年同期比ではマイナス8億円。ここは右に書いてございますように、メラミンの生産終了、販売終了。それからテビックの減収、また原燃料高もございました。

続きまして、機能性材料でございますが、業績予想比で1億円の下のぶれ、若干の下のぶれでございます。内訳で言いますと、ディスプレイは上ぶれになりましたが、半導体が下ぶれになっております。また、前年同期比ではマイナス14億円でございます。ここは一番大きな要因としては、やはり半導体の減収。昨年度の1Qはまだ昨年度下期から始まっております市場全体の調整は始まっていない、非常に好調な時期であったということもあまして、そことの比較になります。また、固定費につきましては増加になっております。

続きまして、農業化学品、ここは業績予想比では予想どおりでございました。後ほどご説明しますが、主要品目の販売では一部下ぶれもございましたが、固定費が下ぶれ、これは増益要因になりまして利益的にはほぼインライン。

一方、前年同期比ではマイナス 2 億円で、特にここにつきましては記載のとおり、フルララネル、動物薬の原薬、この若干の減収もございました。これも後ほどご説明いたします。

最後にヘルスケアでございしますが、ここは業績予想比で 1 億円の上ぶれ、前年同期比では 3 億円の増益で、いずれもファインテックのところでの上ぶれ、増収が寄与しております。

営業外損益・特別損益の内訳

 Nissan Chemical CORPORATION

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比	(億円) 2023年度 1Q予想
受取利息・配当金	3.1	2.9	-0.2	2.8
持分法投資損益	2.3	5.4	+3.1	5.7
為替差損益※1	16.9	14.8	-2.1	0.0
支払利息	-0.4	-1.2	-0.8	-1.5
固定資産処分損他	0.4	-1.4	-1.8	-0.1
営業外損益	22.3	20.5	-1.8	6.9
特別利益	0.0	0.0	0.0	0.0
特別損失	0.0	0.0	0.0	0.0
特別損益	0.0	0.0	0.0	0.0

※1 為替レート(円/ドル): 22/3末 122.41、22/6末 136.69、23/3末 133.54、23/6末 144.99

| 8

続きまして 8 ページでございまして、営業外損益・特損の内訳でございまして、数字で言いますと左から 2 列目の、23 年度 1Q 実績のブルーのところをご覧ください。

営業外損益で言いますと 20.5 億円が、この 1Q の数字でございまして。一番右に前回の予想という数字を載せておりますが、6.9 億円という予想でございましたので、結果的には予想比で 14 億円弱の上ぶれになっております。主たる要因は、上から 3 行目でございまして為替差損益、特に為替

差益が、この1Qでは14.8億円出まして、年初予算ではここは通常どおり0と置いてありますので、この部分が上ぶれに寄与しているということになります。

この為替差益が出た要因でございますが、欄外の※1にございますとおり、為替レートで申し上げますと、23年3月末は133円台に対しまして、23年6月末については約145円で11円強、ドル高円安になっているということが影響しております。

なお、特別損益につきましては先ほどのとおりゼロということで、発生はございません。

キャッシュ・フロー



2023年度1Q実績のフリー・キャッシュ・フローは72億円となり、前年同期比16億円の減少

(億円)

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
営業活動によるキャッシュ・フロー	131	123	-8
税金等調整前純利益	195	171	-24
特別損益(マイナスは益)	0	0	0
減価償却費※1	25	28	+3
法人税等の支払	-75	-74	+1
運転資金増減他	-14	-2	+12
投資活動によるキャッシュ・フロー	-43	-51	-8
設備投資	-34	-64	-30
投資有価証券購入・売却	-4	0	+4
その他	-5	13	+18
フリー・キャッシュ・フロー	88	72	-16
財務活動によるキャッシュ・フロー	-180	-106	+74
株主還元(配当)	-102	-132	-30
株主還元(自己株式取得)	-50	-50	0
借入金増減	-27	76	+103
その他	-1	0	+1
現金及び現金同等物に係る換算差額	8	2	-6
現金及び現金同等物の増減額	-84	-32	+52
連結範囲の変更に伴う現金及び現金同等物の増減額	31	0	-31
現金及び現金同等物の残高	294	265	-29

※1 のれん償却費を含む

| 9

続きまして9ページ、キャッシュ・フローでございます。

23年度1Q実績、ブルーのところでございますが、まず営業活動によるキャッシュ・フローは123億円で、前年同期比が一番右の列にございますけれども、ほぼ昨年並み。

一方で投資活動によるキャッシュ・フローにつきましては51億円のキャッシュアウトで、ここも若干増えておりますが、ほぼ同様のレベルでございます。

従いまして、フリー・キャッシュ・フローとしましては72億円で、前年対比では若干の減でございますが、これに対しまして財務活動によるキャッシュ・フロー、ここが106億円のキャッシュアウトでございます。

内訳としては下に記載のとおり、株主還元のところで配当、それから自己株取得が合計で180億円強ございました。特に配当については、一番左の列の、22年度1Q実績と見比べていただきますと、30億円ほど増えているわけでございますが、これは期末配当につきまして、22年は72円だったのに対して、23年6月の支払分としては94円で、増配をしている関係でございます。

従いまして、最終的な現金の残高としましては265億円でございます、ほぼ昨年同期並みになっております。

貸借対照表



(億円)

	2022年6月末	2023年3月末	2023年6月末	前期末比		2022年6月末	2023年3月末	2023年6月末	前期末比
流動資産	1,726	1,894	1,846	-48	負債	675	772	833	+61
現預金	294	296	264	-32	買入債務	185	199	174	-25
売上債権	800	827	778	-49	借入金	206	273	374	+101
たな卸資産	558	647	716	+69	その他	284	300	285	-15
その他	74	124	88	-36	純資産	2,097	2,215	2,181	-34
固定資産	1,046	1,093	1,168	+75	株主資本※1	1,955	2,088	2,029	-59
有形固定資産	569	647	721	+74	その他有価証券評価差額金	86	77	81	+4
無形固定資産	120	115	114	-1	為替換算調整勘定	22	17	34	+17
投資有価証券	298	273	276	+3	非支配株主持分	30	31	35	+4
その他	59	58	57	-1	退職給付に係る調整累計額	4	2	2	0
資産合計	2,772	2,987	3,014	+27	負債純資産合計	2,772	2,987	3,014	+27
					自己資本比率	74.5%	73.1%	71.2%	
					D/Eレシオ※2	-4.5%	-1.1%	+5.4%	

投資有価証券(固定資産)の内訳

	2022年6月末	2023年3月末	2023年6月末	前期末比
上場株式※3	193	169	174	+5
(単体ベース保有銘柄数)	(30)	(26)	(26)	(0)
非上場株式	31	24	26	+2
関係会社株式	74	80	76	-4
合計	298	273	276	+3
純資産に占める 政策保有株式の割合※4	9.9%	7.9%	8.3%	

参考
2018年3月末
300
(55)
17
68
385
17.0%

※1 株主資本増減 -59 = 純利益122 - 配当その他181 ※2 D/Eレシオ = (借入金 - 現金預金) / 株主資本
 ※3 23/3末 169 + 取得0 + 評価差額5 = 23/6末 174 ※4 政策保有株式割合 = 政策保有株式(単体ベース、上場株+非上場株) / 純資産(連結ベース)

続きまして、バランスシートでございます。10ページをご覧ください。

左の上のところは資産サイドになりますが、前期末比ということで、右の列にございますとおり、資産合計では23年3月末対比で27億円の資産増となっております。

内訳としては、流動資産でマイナス 48 億円でございますが、固定資産のところ、特に有形固定資産が 70 億円強増加しているということでございます。

一方右の負債サイドでございますが、61 億円の増加ということで、特に借入金が 23 年 3 月末比では 100 億円ほど増加をしておりますが、買入債務等々でマイナスということで、ネットとしては 61 億円の増加。純資産のところは 34 億円の減少でございます。

自己資本比率は、下に書いてあるとおり 71.2%で、引き続き非常に健全な財務体制でございます。

なお、左下に投資有価証券の内訳を載せております。ブルーのところ、この 23 年 6 月末につきましては、合計で 276 億円でございますが、単体ベースの保有銘柄数としては 26 銘柄ということで、23 年 3 月末からは変わっておりません。

参考までに、一番右の列、18 年 3 月末、約 5 年前の数字を載せておりますが、銘柄数でいいますと 55 銘柄から足元 26 銘柄で、半分以下にまで削減をしているということがお分かりいただけると思います。

一番下の行にございますとおり、純資産に占める政策保有株式の割合としましては 10%を下回る 8%台が現時点の 23 年 6 月末の状況でございました。

セグメント別 2023年度1Q決算 前年同期比

(億円)

		2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
化学品	売上高	104	91	-13 (-13%)
	営業利益	17	9	-8 (-46%)
機能性材料	売上高	218	208	-10 (-4%)
	営業利益	79	65	-14 (-18%)
農業化学品	売上高	197	188	-9 (-5%)
	営業利益	68	66	-2 (-4%)
ヘルスケア	売上高	17	20	+3 (+18%)
	営業利益	8	11	+3 (+44%)
卸売・その他・調整額	売上高	47	42	-5
	営業利益	1	-1	-2
合計	売上高	583	549	-34 (-6%)
	営業利益	173	150	-23 (-13%)

※ セグメント間の内部売上高又は振替高を含む

※ 卸売：日星産業、その他：日産物流・日産緑化・日産エンジニアリング・NC東京ベイ(旧社名：日本燐酸。硫酸の製造。2023年度より連結子会社化)・日本肥糧ほか、調整額：企画本部ほか(内訳はp55,p56参照)

続きまして、セグメント概況に入ります。

12 ページをご覧ください。こちらは、セグメントごとの前年同期比の売上ならびに営業利益の増減でございます。数字は先ほど申し上げましたので後ほどご覧ください。

セグメント別 2023年度1Q決算 業績予想比

(億円)

		2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
化学品	売上高	94	91	-3
	営業利益	9	9	0
機能性材料	売上高	205	208	+3
	営業利益	66	65	-1
農業化学品	売上高	192	188	-4
	営業利益	66	66	0
ヘルスケア	売上高	19	20	+1
	営業利益	10	11	+1
卸売・その他・調整額	売上高	38	42	+4
	営業利益	-6	-1	+5
合計	売上高	548	549	+1
	営業利益	145	150	+5

※ セグメント間の内部売上高又は振替高を含む

※ 卸売: 日産産業、その他: 日産物流・日産緑化・日産エンジニアリング・NC東京ベイ(旧社名: 日本燐酸。硫酸の製造。2023年度より連結子会社化)・日本肥糧ほか、調整額: 企画本部ほか(内訳はp55、p56参照)

13 ページ、こちらは業績予想比でございます。ここも先ほど申し上げたとおりでございますので、後ほどご覧ください。

- ファインケミカルは、1Qで29%減収、業績予想比でも下ぶれ
- 基礎化学品は、1Qで2%減収、業績予想比でも下ぶれ

主要製品	2023年度 1Q実績	2023年度 1Q予想
	前年同期比	前年同期比
テピック	-66%	-61%
環境化学品	+16%	+15%
ファインオキシコール	-25%	-19%
ファインケミカル合計 ^{※1}	-29%	-26%
メラミン ^{※2}	-100%	-100%
尿素・アドブルー [®]	+33%	+40%
高純度硫酸	-13%	-12%
硝酸製品	+71%	+83%
基礎化学品合計 ^{※3・4}	-2% (+26%)	+1% (+30%)
化学品セグメント合計 ^{※3}	-13% (+1%)	-10% (+4%)

※1 テピック、環境化学品、ファインオキシコールの2023年度1Q実績ファインケミカル売上高に占める割合: 85%

※2 メラミンは2022年6月生産停止、12月販売終了(p19参照、メラミン生産停止による構造改革)

※3 ()内伸び率は、2022年度実績・2023年度実績ともにメラミンを除く

※4 メラミン、尿素・アドブルー[®]、高純度硫酸、硝酸製品の2023年度1Q実績基礎化学品売上高に占める割合: 48%

では、個別に化学品のセグメントからご説明いたします。15 ページでございます。

主要製品の売上高成長率でございますが、冒頭の文章でございますとおり、まずファインケミカルでは、1Q では前年同期比 29%の減収、また業績予想比でも若干下ぶれでございました。特に数字を見てお分かりいただけるとおり、テピック、中でも一般品のところの数量減がここで響いております。

一方、基礎化学品でございますが、ここは今期メラミンが完全に販売ゼロとなっておりますが、トータルとしては1Q では2%のYoY の減収、業績予想比でも若干の下ぶれでございます。

【1Q】売上高-13億円(うちメラミン-14億円)、営業利益-8億円

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
売上高	104	91	-13
ファインケミカル	42	30	-12
基礎化学品	62	61	-1
営業利益	17	9	-8

	【1Q】減収・減益	【1Q】減収・営業利益横ばい
ファインケミカル	テピック一般 需要減で減収	メラミン 終売で減収
	テピック電材 減収	尿素・アドブルー® 増収(メラミン停止により増販、価格上昇)
	環境化学品 増収	高純度硫酸 減収
	ファインオキシコール 減収	硝酸製品 数量増、価格上昇により増収 (22年度硝酸プラントトラブル影響)
	原燃料高(減益要因)	原燃料高(減益要因)
基礎化学品		

16 ページ、こちらは前年同期比の 1Q の数字でございます。

営業利益で前年同期比マイナス 8 億円でございます。下に少しコメントしておりますが、まずファインケミカルでは減収減益でございまして、先ほど申し上げましたとおり、テピック一般での需要減が大きかったということがございます。

また、基礎化学品は右下に書いてございますとおり、売上としては減収とありますが、若干の 1 億円の減収、営業利益では横ばいでした。

メラミンは終売で減収となっておりますが、それ以外の尿素・アドブルー等々で増収となりました。

また原燃料高ということで少し減益要因を書いてございますけれども、実態は天然ガスの調達コストとしてはほぼプラマイゼロでございましたが、一方で電力代の値上げが若干マイナスで効いているということでございました。

【1Q】売上高-3億円、営業利益予想通り

	2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
売上高	94	91	-3
ファインケミカル	31	30	-1
基礎化学品	63	61	-2
営業利益	9	9	0

(億円)

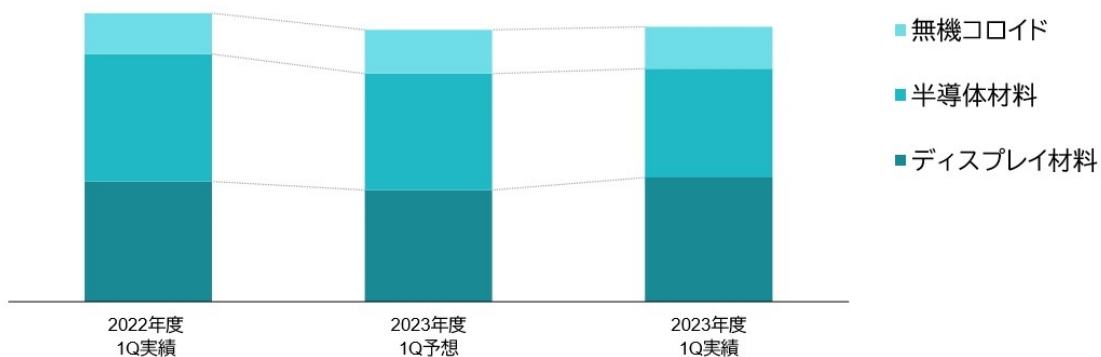
【1Q】売上高・営業利益とも下ぶれ

ファインケミカル	
テピック一般	数量減により売上高下ぶれ
テピック電材	売上高上ぶれ
環境化学品	売上高予想通り
ファインオキシコール	売上高下ぶれ

【1Q】売上高下ぶれ、営業利益上ぶれ

基礎化学品	
尿素・アドブルー®	売上高下ぶれ
高純度硫酸	売上高予想通り
硝酸製品	売上高下ぶれ
原燃料安(増益要因)	

続きまして、17ページでございます。これは業績予想比でございます、売上では3億円の**下ぶれ**、一方営業利益では先ほど申し上げましたとおり、予算どおりになりました。



主要製品

ディスプレイ材料		半導体材料		無機コロイド	
サンエパー	液晶配向材用ポリイミド	ARC®	半導体用反射防止コーティング材	スノーテックス	研磨剤(シリコンウェハー、化合物半導体、半導体CMP等) 特殊銅板
		多層材料	半導体用多層プロセス材料 (OptiStack®)	オルガノゾル・モノマーゾル	電子機器用フィルム表面処理、樹脂添加剤
		EUV材料	EUVプロセス材料	オイル&ガス材料	シールドオイル・ガス探掘効率向上材

続きまして、機能性でございます。少しページが飛びますけれども、21 ページでございます。

ここはいつものようにサブセグメント別の売上高のイメージを棒グラフで載せております。

23 年度 1Q 実績、一番右の棒グラフでございますが、下からディスプレイ、真ん中が半導体、それから一番上が無機でございます。

- ディ스플레이材料は、1Qで3%増収、業績予想比でも上ぶれ
- 半導体材料は、1Qで15%減収、業績予想比でも下ぶれ
- 無機コロイドは、1Qで3%増収、業績予想比で下ぶれ

主要製品	2023年度 1Q実績	2023年度 1Q予想
	前年同期比	前年同期比
サンエパー	+4%	-7%
ディスプレイ材料合計	+3%	-7%
ARC®	-18%	-11%
多層材料	-15%	-4%
EUV材料※1	+15%	-6%
半導体材料合計	-15%	-9%
スノーテックス	0%	+7%
オルガノゾル・モノマーゾル	-7%	+18%
オイル&ガス材料	+49%	+21%
無機コロイド合計	+3%	+8%
機能性材料セグメント合計	-4%	-6%

※1 EUV材料: EUV向け下層膜とSi-HMの合計

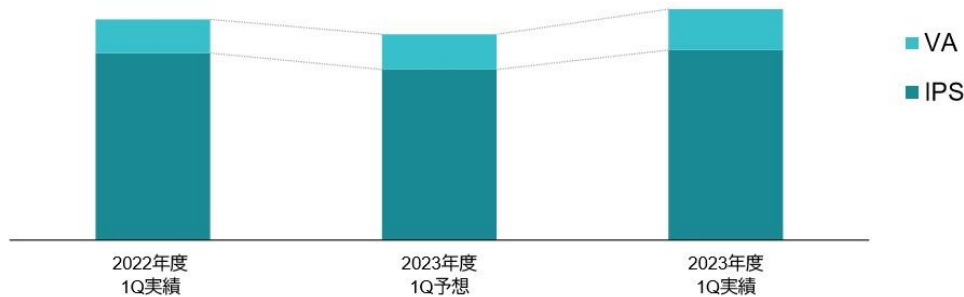
続きまして、主要製品の売上高成長率は 22 ページでございます。

まず、冒頭に書いてございますとおり、ディスプレイにつきましては、この 1Q 前年同期比で 3% 増収、前年の 22 年度 1Q 実績はまだ非常に好調だった頃で、そこと比較してもプラス 3%、また業績予想比でも上ぶれとなっております。

一方半導体でございますが、ここは 1Q では前年同期比 15%の減収、また業績予想比でも下ぶれでございます。ここは逆に 22 年度 1Q が好調でございましたが、足元は昨年度下期から調整局面に入っているということでございまして、このような数字でございました。

最後に無機でございますが、1Q では前年同期比で 3%の増収、また業績予想比では下ぶれとなっております。

1Qはサンエバー合計で4%増収、業績予想比でも上ぶれ
他モード(ラビングIPSなど)から光IPSへの転換は順調に進む



主要用途

- VA (Vertical Alignment) テレビ
- IPS (In-Plane Switching) スマートフォン、タブレット、PC、モニター、車載

モード別売上高成長率	2023年度 1Q実績	
	前年同期比	業績予想比
VA	増収(+20~ +29%)	上ぶれ
IPS	増収(+0 ~ +9%)	上ぶれ
サンエバー合計(TN*含む)	+4%	上ぶれ

※ TN(Twisted Nematic) 主要用途はPC、モニター

続きまして、ディスプレイのモード別でございます。23 ページでございます。

冒頭書いてございますように、サンエバー合計では、この1Qで前年同期比4%の増収、業績予想比でも上ぶれでございまして、引き続き他のモード、ラビング等から、光IPSへの転換が順調に進んでいるというところは変わりございません。

下の表でございしますが、売上高の成長率ということで、VAそれからラビング、光合わせたIPS、ここもそれぞれ増収ならびに上ぶれでございました。

【1Q】売上高-10億円、営業利益-14億円、固定費増加合計8億円

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
売上高	218	208	-10
営業利益	79	65	-14

【1Q】増収・減益

ディスプレイ	光IPS	増収 (スマホ・大型モニター・車載向け増収)
	ラビングIPS	横ばい
	VA	増収(一部シェア拡大)
	固定費増加1億円	

【1Q】減収・減益

半導体	ARC®	減収
	多層材料	減収
	EUV材料	増収 (EUV下層膜が顧客生産増に伴い増収)
	固定費増加6億円	

【1Q】増収・増益

無機コロイド	スノーテックス	横ばい(一般用途増収、研磨剤減収)
	オルガノ・モノマーゾル	減収
	オイル&ガス材料	増収
	固定費増加1億円	

| 24

続きまして 24 ページ、具体的な利益の数字でございます。

売上高としましては、YoY では機能性全体で 10 億円の減収、また営業利益が 14 億円の減益、そのうち固定費の増加ということで 8 億円、これが費用サイドに出ております。

この大半が半導体の影響でございまして、先ほど申し上げましたとおり、半導体は 1 年前の 22 年 1Q、大変市場が良かった時点との比較になりますので、このような結果でございまして。

それぞれ下にサブセグメントごとにコメントを付しております。ディスプレイにつきましては増収ですが、若干の減益でございました。固定費増加 1 億円というのもございます。また、半導体につきましては減収減益でございまして、ここで固定費の増加、機能性全体 8 億円のうちの 6 億円、これが、この半導体の部分になります。

一方で、EUV の材料につきましては増収でございました。無機は若干の増収増益でございまして。

【1Q】売上高+3億円、営業利益-1億円、固定費下ぶれ合計1億円(増益要因)

	2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
売上高	205	208	+3
営業利益	66	65	-1

【1Q】売上高・営業利益とも上ぶれ

ディスプレイ	光IPS	売上高上ぶれ (スマホ・大型モニター向け上ぶれ)
	ラビングIPS	売上高上ぶれ
	VA	売上高上ぶれ

【1Q】売上高・営業利益とも下ぶれ

半導体	ARC®	売上高下ぶれ
	多層材料	売上高下ぶれ
	EUV材料	売上高上ぶれ
	固定費下ぶれ1億円(増益要因)	

【1Q】売上高・営業利益とも下ぶれ

無機コロイド	スノーテックス	売上高下ぶれ(一般用途・研磨剤下ぶれ)
	オルガノ・モノマーゾル	売上高下ぶれ
	オイル&ガス材料	売上高上ぶれ

25 ページ、ここは業績予想比でございます。

冒頭に書いてございますとおり、売上高では3億円の上ぶれ、営業利益では1億円の若干の下ぶれでございました。

なお固定費につきましても、右下に書いてございますとおり、これは増益要因でございますけれども、半導体のところで1億円下ぶれになっております。

なお、ディスプレイにつきましては、ここに売上高、営業利益の上ぶれと書いてございますが、一部クライアントのところで在庫の積み増し分の出荷もございましたことも、この上ぶれには寄与しているということになります。

いずれにしましても、光、ラビング、VA、それぞれ業績予想対比で上ぶれになっております。


■ 1Qで5%減収、業績予想比でも下ぶれ

主要製品名 (農業:2022年度売上高順)	種類	2023年度 1Q実績	2023年度 1Q予想
		前年同期比	前年同期比
農薬	ラウンドアップ ^{※1}	-14%	+2%
	アルテア	-7%	+12%
	タルガ	+10%	-17%
	ライメイ	-60%	-46%
	グレーシア	+87%	+58%
	ダイセン	-21%	-23%
	パーミット	+9%	-4%
動物薬	フルララネル	-4%	-3%
セグメント合計 ^{※2}		-5%	-3%

参考

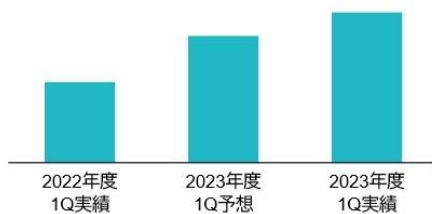
- 国内農業販売 第1位
(2020年10月~2021年9月)

[ラウンドアップの現状説明会資料](#) 
(2020年1月22日発表)

[農業化学品事業説明会資料](#) 
(2022年9月28日発表)

※1 ラウンドアップALは、2023年度1Q実績のラウンドアップ売上高全体の33%を占める
※2 セグメント合計の前年同期比は値引きを含む

■ グレーシア売上高



参考

2022年度 決算説明資料(2023年5月15日発表)
Part2 p35 グレーシア売上高成長予想

続きまして、農業化学品でございます。27 ページに飛んでいただきまして、主要製品の売上高の成長率でございます。

冒頭でございますように、この1Qでは、前年対比では5%の減収、また業績予想比では若干の下ぶれになっております。

農薬の場合は、見ていただきますと、剤ごとにプラスマイナスの幅がかなり大きいわけですが、やはり四半期ごとで比較をするというのはあまり有用ではないかもしれませんが、数字としてはこのような形になります。

特にこの中で言いますと、プラスで大きいのがグレーシアでございます。プラス87%のYoYで、下の棒グラフのとおり、22年度1Q実績対比ではプラス87%、また、5月に発表しました1Q予想比に対しましても二桁のプラスになっております。

それから、動物薬、フルララネルでございますが、後ほど申し上げますけども、この前年同期比ではマイナス4%という数字でございました。

【1Q】売上高-9億円、営業利益-2億円、固定費増加2億円

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
売上高	197	188	-9
営業利益	68	66	-2

(億円)

主要製品	製品名	変動
	ラウンドアップ(除草剤)	減収(天候不良によりML・ALともに数量減)
	アルテア(除草剤)	減収(国内:流通在庫増加により数量減)
	タルガ(除草剤)	増収(輸出:欧州で販売好調)
	ライメイ(殺菌剤)	減収(輸出:22年度は1Qに販売が偏重)
	グレーシア(殺虫剤)	増収(輸出:アジアでの拡販)
	ダイセン(殺菌剤)	減収(輸出:22年度1Qは21年度からの後ろ倒し)
	パーミット(除草剤)	増収
	フルララネル(動物薬)	減収(原薬:21年度から22年度へ後ろ倒し、ロイヤリティ収入:増加)

前年同期比のところの数字でございまして、28ページをご覧ください。

売上高で言いますと、9億円の減収また営業利益でも固定費の増加2億円もございまして、2億円の減益ということとなっております。

主要製品ごとに少しコメントを付しておりますが、先ほどの前年同期比の数字と併せて見ていただきたいと思いますが、ここはまずラウンドアップでは減収、ここは天候不良によりまして、特にゴールデンウィーク明け以降で、ML・ALともに数量減が数字として出ております。

また、アルテアにつきましても、若干の減収で、国内流通在庫の増加というところから数量減が少し起きたということもございます。

一方、タルガにつきましても、欧州での販売が好調ということで増収。

ライメイは、これは特殊要因でございまして、昨年22年度は1Qに販売がかなり偏っていたということで、それが今期につきましても1Qではなくて、むしろ2Qに偏るということから、この1QのYoYでは減収になっております。

グレースは、先ほど申し上げましたとおり、特にアジアの拡販が進んでおりますが、一部前倒し出荷もございました。

最後に、フルララネルでございますが若干の減収でございます、ここは原薬、これが22年度1Qは、その前の21年度の下期から一部出荷の後ろ出しがございました関係で発射台が高くなっていることから、比較しますと若干のマイナス。一方、ロイヤリティにつきましては増加になっております。

【1Q】売上高-4億円、営業利益予想通り、固定費下ぶれ4億円(増益要因)

	2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
売上高	192	188	-4
営業利益	66	66	0

(億円)

主要製品	商品名	売上高下ぶれ(天候不良によりML・ALともに下ぶれ)
	ラウンドアップ(除草剤)	売上高下ぶれ(天候不良によりML・ALともに下ぶれ)
	アルテア(除草剤)	売上高下ぶれ(国内:流通在庫増加により下ぶれ)
	タルガ(除草剤)	売上高上ぶれ(輸出:欧州で販売好調)
	ライメイ(殺菌剤)	売上高下ぶれ
	グレースシア(殺虫剤)	売上高上ぶれ(輸出:23年度2Qからの前倒し)
	ダイセン(殺菌剤)	売上高上ぶれ
	パーミット(除草剤)	売上高上ぶれ
	フルララネル(動物薬)	売上高予想通り

続きまして、29 ページ、こちらは業績予想比になります。

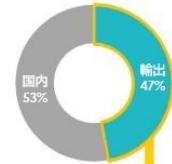
見ていただくと分かる通り、売上高では 4 億円の下ぶれ、一方営業利益につきましては予想どおりでございました。この中には固定費下ぶれ 4 億円、これは増益要因でございますけど、これも入っているということでございます。

主要製品のコメントにつきましては、ほぼ先ほど申し上げたとおりでございますが、最終行、フルララネル動物薬につきましては、これは予想どおりということでございます。

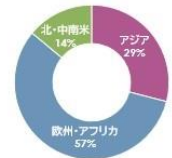
上市年度	製品名	分類	開発経緯	備考
2002	ラウンドアップ	除草剤	買収	米国モンサント社より国内事業を買収、継続成長中
2008	ライメイ	殺菌剤	自社開発	
2008	スターマイト	殺虫剤	自社開発	
2009	バルサー(チフルザミド)	殺菌剤	買収	米国ダウ社より世界事業を買収
2009	プレバゾン	殺虫剤	導入	米国デュポン社より導入
2010	ラウンドアップマックスロードAL	除草剤	自社開発	一般家庭向け希釈済みシャワータイプ除草剤。2016年AIⅡ、2018年AIⅢ上市、急成長
2011	アルテア	除草剤	自社開発	2011年韓国で上市、2012年日本で上市
2013	フルララネル	動物用医薬品原薬	自社開発	米国MSD社 ^{※1} 向けにプラバクト [®] 原薬として出荷開始
2014	プラバクト [®] ※2	ペット動物用医薬品	-	2014年4月欧州、6月米国、15年7月日本で上市
2015	トレファノサイド	除草剤	導入	米国ゴーワン社がダウ社より買収、当社は国内販売独占権を継承
2017	ネクスター	殺菌剤	導入	スイスシンジェンタ社より導入
2017	トランスフォーム [™] /エクシード [™] /ピレスコ [™]	殺虫剤	導入	米国ダウ社より導入
2017	エグゾルト [®] ※2	家畜動物用医薬品	-	9月米国MSD社による、欧州でのニフトリ用製品上市
2018	グレーシア	殺虫剤	自社開発	広範囲の重要害虫に有効、ミツバチへの影響が少ない。2018年韓国、2019年日本、2021年インド・インドネシアで上市(ピーク売上高目標100億円)
2019	クインテック(キノキシフェン)	殺菌剤	買収	2019年11月米国コルテバ社より世界事業を買収。果樹野菜のうどんこ病(カビの1種)の発病予防に非常に効果的
2020	ダイセン(マンゼブ)	殺菌剤	買収	2020年12月米国コルテバ社より日本・韓国事業を買収。果樹野菜用の保護殺菌剤、耐雨性に優れる
2024	未定(ジメスルファゼット)(NC-653)	除草剤	自社開発	イネへの優れた安全性があり、抵抗性ホタルイや難防除雑草クログワイに高い効果を持つ(ピーク売上高目標35億円)
2025	未定(NC-520)	殺虫剤	共同開発	他社との共同開発の新規水稲用殺虫剤。ウンカ類への効果が高い(混合剤も含めピーク売上高目標25億円)
2027	未定(イブトリアソピリド)(NC-656)	除草剤	自社開発	抵抗性イネ科雑草(ヒエ・アゼガヤ)に優れた効果を持つ。当社初の水稲用茎葉除草剤(ピーク売上高目標100億円)

※1 MSD社:米国メルク社のアニマルヘルス事業部門のMSD Animal Health 社の略称 ※2 プラバクト[®]・エグゾルト[®]:MSD社の販売製品名 ※3 フルララネルを含める

農業化学品セグメントの輸出比率(2022年度実績)^{※3}



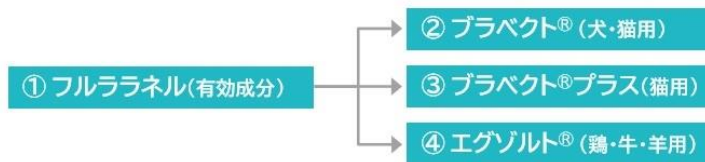
- 地域別分布



新製品群のピーク売上高目標合計 **310** 億円

次の 30 ページ、主要製品一覧等は、特に 22 年 5 月発表の文章から変えておりません。

- 当社が発明した化合物「フルララネル」を有効成分とするブラバクト®シリーズ・エグゾルト®は現在100か国以上で販売中
- ブラバクト®最大の特徴は12週間にわたる効果持続性(既存製品は1か月程度)



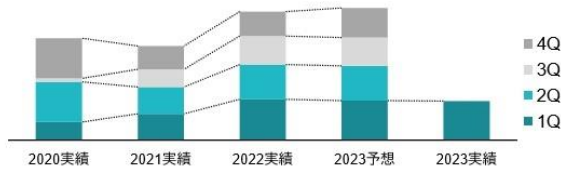
① フルララネル(Fluralaner)	② ブラバクト® (BRAVECTO®)	③ ブラバクト®プラス (BRAVECTO® Plus)	④ エグゾルト® (EXZOLT®)
<ul style="list-style-type: none"> ■ ブラバクト®・エグゾルト®の有効成分。当社がMSD社※1に供給 ■ これまでのペット用外部寄生虫薬とは異なる新たな作用機序を有している ■ 化合物特許 <ul style="list-style-type: none"> ● 2025年3月に終了するが、多数の国で延長制度あり ● UK、ドイツ、フランス等一部欧州諸国では、2029年2月まで延長済み、米国は延長申請中 	<ul style="list-style-type: none"> ■ MSD社が開発したペット用外部寄生虫薬。犬・猫のノミ、マダニの主要種に対し即効性に優れる ■ 通常1か月毎に投薬する既存製品より殺虫効果の持続性が長く、12週間※2にわたって持続する ■ 犬向けチュアブルタブレット(経口投与製剤) <ul style="list-style-type: none"> ● 2014年4月欧州、以降米国、日本等で上市、2019年7月中国上市 ● 2020年7月1か月剤(子犬向け)米国上市 ■ 犬、猫向けスポットオン製品(経皮投与製剤) <ul style="list-style-type: none"> ● (猫)2016年7月欧州、以降米国、日本等上市 ● (犬)2017年1月米国・欧州等上市、2021年1月日本上市 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 猫向け内外寄生虫スポットオン合剤 <ul style="list-style-type: none"> ● 2018年7月欧州、以降米国等上市、2021年1月日本上市 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 鶏向けワクモ駆除剤(飲水投与) <ul style="list-style-type: none"> ● 2017年9月欧州、以降韓国、中東等上市、2021年7月日本上市 ■ 牛向け <ul style="list-style-type: none"> ● 2022年9月ブラジル上市、2023年4月メキシコ上市 ■ 羊向け <ul style="list-style-type: none"> ● 2023年3月オーストラリア販売承認

※1 米国メルク社のアニマルヘルス事業部門のMSD Animal Health 社の略称 ※2 クリロロイタマダニは8週間

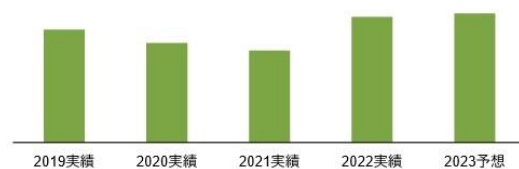
■ 当社のフルララネル売上高の構成

MSD社へのフルララネル販売 + MSD社からのランニングロイヤリティ(RR)

■ 2020～2023年度 四半期別売上高推移 (RR収入含む)



■ 2019～2023年度 売上高推移イメージ (RR収入含む)



ロイヤリティ収入は、2020年度まで2・4Q計上であったが、会計方針の変更にともない、2021年度からは各四半期に計上されている(p57参照)

・フルララネルの在庫調整は2021年度で完了
 ・2022年度は、2021年度からの出荷後ろ倒しと円安影響により大幅増収。実績為替レートは136円/ドル
 ・2023年度の想定為替レートは128円/ドル

■ ブラベクト®の拡大に向けたMSD社の開発状況

- フルララネルを有効成分とするペット向けの新たな内外部寄生虫薬をMSD社が開発中
- 2023年5月 犬向け外部寄生虫注射剤BRAVECTO Quantum™が豪州にて承認(特徴:12か月※1の効果持続性)

※1 クライロコイタマダニは11か月

また、動物薬のところでございますが、31 ページ、32 ページとも、基本的には前回の5月のままでございます。

【1Q】売上高+3.0億円、営業利益+3.3億円

(億円)

	2022年度 1Q実績	2023年度 1Q実績	前年同期比
売上高	16.5	19.5	+3.0
ヘルスケア	8.3	6.1	-2.2
ファインテック	8.2	13.4	+5.2
営業利益	7.6	10.9	+3.3
ヘルスケア	3.9	2.8	-1.1
ファインテック	3.7	8.1	+4.4

※ p12,p13,p55,p56では億円未満を四捨五入して表示しており、これにより本ページの数字と合致しない場合がある

ヘルスケア	【1Q】減収・減益
リバロ	減収(国内・輸出とも減収)

ファインテック	【1Q】増収・増益
	今期販売は1Q偏重により増収

| 37

以上で農業化学品のご説明でございまして、最後にヘルスケアになります。ページで申し上げますと37ページです。

ここは前年同期比ということで、下のコメントにもございますけども、ヘルスケア、リバロのところは若干の減収減益でございましたが、ファインテックが増収増益ということで、特にここは今期の販売につきましてはやや1Q偏重になりました関係で、増収増益になっております。

【1Q】売上高+0.7億円、営業利益+1.2億円

(億円)

	2023年度 1Q予想	2023年度 1Q実績	業績予想比
売上高	18.8	19.5	+0.7
ヘルスケア	6.1	6.1	0.0
ファインテック	12.7	13.4	+0.7
営業利益	9.7	10.9	+1.2
ヘルスケア	2.7	2.8	+0.1
ファインテック	7.0	8.1	+1.1

※ p12,p13,p55,p56では億円未満を四捨五入して表示しており、これにより本ページの数字と合致しない場合がある

ヘルスケア 【1Q】売上高・営業利益ともに予想通り
 リバロ 売上高予想通り(国内上ぶれ、輸出下ぶれ)

ファインテック 【1Q】売上高・営業利益ともに上ぶれ
 ジェネリック原薬上ぶれで売上高上ぶれ

| 38

一方、38 ページ、ここは業績予想比でございまして、リバロのところはほぼ予定どおりでござい
 ますが、ファインテックにつきましては若干の上ぶれになっております。

E (環境) S (社会)	2021年4月	ダイバーシティステートメントおよびダイバーシティビジョンを設定
	2022年5月	2050年にカーボンニュートラルへ温室効果ガス(GHG)排出削減長期目標を設定(詳細はp43参照)
	2022年6月	メラミン停止によるGHG削減(26千トン、2018年度実績の約7%に相当)
	2022年6月	気候変動対策委員会設置
	2022年9月	「 統合レポート2022 」を発行
G (ガバナンス)	2019年4月	指名・報酬諮問委員会設置(取締役会の任意の諮問機関)
	2019年6月	取締役等を対象に業績連動型株式報酬制度導入(株式給付信託)
	2022年6月	役員報酬体系にESG指標を組入れ(基本報酬65%、業績報酬28%、株式報酬7%、業績報酬28%のうち、利益連動部分90%、ESG連動部分10%)
	2023年6月	女性取締役(社外)2名選任(選任後、取締役は計10名、うち社外4名)
	2023年6月	「 コーポレートガバナンス報告書 」を更新

続きまして、ESG トピックスということで、40 ページでございます。

ここでは23年6月ということで、ガバナンスの下の2つの行で少しコメントさせていただきますと、この6月には株主総会を経まして、ボードメンバーとして社外の女性取締役、従来は1名でありましたが、もう1名追加ということで、2名の選任ということになっております。

従いまして、取締役合計10名から見ますと20%が女性になりますし、社外の4人のうち半数が女性になっております。

また、コーポレートガバナンス報告書につきましては、この6月に更新をしております。

Dow Jones Sustainability Asia Pacific Index

- 2022年12月
5年連続で構成銘柄に選定

Member of
**Dow Jones
Sustainability Indices**
Powered by the S&P Global CSA

S&P/JPX カーボン・エフィシエント指数

- 2022年3月
4年連続で構成銘柄に選定



FTSE

- 2023年6月 FTSE4Good Index Series、FTSE Blossom Japan Indexの構成銘柄に4年連続選定
- 2023年6月 FTSE Blossom Japan Sector Relative Indexの構成銘柄に2年連続選定

※ FTSE Russell (FTSE International Limited と Frank Russell Companyの登録商標)はここに日産化学株式会社が第三者調査の結果、FTSE Blossom Japan Sector Relative Index組み入れの要件を満たし、本インデックスの構成銘柄となったことを証します。FTSE Blossom Japan Sector Relative Indexはサステナブル投資のファンドや他の金融商品の作成・評価に広く利用されます。



MSCI 日本株女性活躍指数 (WIN)

- 2023年6月 4期連続構成銘柄に選定

**2023 CONSTITUENT MSCI日本株
女性活躍指数 (WIN)**

※ MSCI指数への日産化学株式会社の組み入れ、および本ページにおけるMSCIロゴ、商標、サービスマーク、または指数名称の使用は、MSCIまたはその関係会社による日産化学株式会社の後援、保証、または販売促進ではありません。MSCI指数は、MSCIの独占的財産です。MSCIおよびMSCI指数の名称とロゴは、MSCIまたはその関係会社の商標またはサービスマークです。

健康経営優良法人 -ホワイト500-

- 2023年3月 7年連続認定



「子育てサポート企業」くるみん

- 2023年1月 2回連続認定



GPIFの運用機関が選ぶ統合報告書

- 2022年2月 「優れた統合報告書」に2年連続選定
- 2023年2月 「改善度の高い統合報告書」に選定

気候関連財務情報開示タスクフォース(TCFD)

- 2020年8月に賛同表明



GXリーグ

- 2023年2月に賛同表明
- 2023年4月から参画



続きまして 41 ページ、ここは ESG 等に関する外部評価のところでございます。

上から 2 つ目の FTSE、それから右の MSCI の日本株女性活躍指数につきましては、この 6 月をもちまして、それぞれ 4 年・2 年連続ないしは 4 期連続の選定になっております。

GHG排出量の削減

- 2050年のカーボンニュートラル実現に向け、従来の取り組みに加え、生産技術の改善や再生エネルギー導入などに注力する
- GHG排出量2027年度目標:2018年度比30%削減(SCOPE1+2)



他社とのGHG排出量の比較

年度	2011	2018	2019	2020	2021
日産化学	448	363	327	318	345
大手総合化学4社平均 (単体ベース)	-	-	5,845	5,581	-

中期経営計画 Vista2027

(2022-2027年度)における取り組み

- 硝酸プラントからのN₂O排出ゼロ (予定投資額 500百万円 変動費50百万円/年)
- メラミン製造中止
- 小野田工場燃料転換
- ICP本格導入によるGHG排出削減推進
- フロン機器の削減
- 省エネ機器への更新

| 43

最後に 43 ページ、GHG の排出量ということで、この 22 年度実績につきましては、棒グラフのここにございますように、32 万 8 千トンでございました。

従いまして、21 年度実績から見ますと約 5%の減少になっております。

いずれにしましても、27 年度の目標でございます 25 万 4 千トン、これは 18 年度実績から 3 割減を目指すわけですが、ここに向かって右下に書いてあるような施策でもちまして実現してまいりたいと思っております。

私の説明は以上でございます。

質疑応答

<質問者 1>

Q: 2つお願いいたします。まず1つ目が機能性材料ですけれども、ディスプレイと半導体、それぞれ今の足元の動きと、あと1QでVAがかなり強かったのも、この辺りのご説明もお願いいたします。

A: 機能性の足元ということですが、まずディスプレイにつきましては、1Qが想定よりは良かったということですが、この中には先ほど申し上げましたように一部出荷の前倒し、あるいは在庫の積み増しもございました。いずれにしても、昨年度の2Qをボトムとして徐々に回復しているところは変わっていないかなと思っています。VAにつきましては、テレビ等の回復、それから昨年度下期から、一部シェア増というのもこの数字には寄与しているということでございます。

それから半導体につきましては、これはご案内のとおり昨年度の下期から調整局面に入っておりまして、この足元1Qについては、先ほど申し上げたような数字ということで、今後につきましては、この調整局面がいつ頃から回復してくるのかを今見ているという感じでございます。

Q: 先ほどの前倒しとか、在庫積み増しがVAであったわけでは特にはないですね。

A: 積み増しのところは光IPSにてあったということでございます。

Q: 2つ目が農業関連ですけれども、かなり農薬市場が動いておりまして、地域別にはどのような動きなのか、フルラネルの最終製品の需要動向についてもお願いします。

A: 農薬の地域別の動向ということで、これは海外と国内に分けてご説明させていただきます。まず国内につきましては、確かに相当動いておりまして、各社とも国内の4-6月の販売数が芳しくない、当社も当然それと同じような傾向でありましたが、特に国内におきましては、いろいろな地域で出っこみ引っ込みはあるのですが、どこかがすごく悪いわけではなく、日本全土、国内全般に悪かったということでございます。

この原因としましては、価格が上がる前に流通が相当買い込まれて、その在庫が滞留しており4-6月のメーカー出荷が少なかったと考えています。

海外におきましては、これも地域別でかなり出っこみ引っ込みがございまして、当社の農薬といたしましては、全般的に見ますとグレーシアが牽引したということもございますが、アジアにて好調であったということが1つございます。農薬の地域別は以上でございます。

動物薬のところでございますけれども、この第1Qにつきましては先ほどの数字のとおり、見通しとほぼインラインでございましたが、YoYではマイナス4%です。ただ、これは先ほど申し上げました22年度1Qが少し特殊な要因で増えたということでございます。年間では3%の23年度YoYの増収という見方は変えておりませんが、メルク社も一部グローバルのブラケットの売上を開示し始めておりますので、恐らくその数字に沿って、私どもの数字も成長していくのかなと思っております。

Q: 承知しました。ありがとうございました。

<質問者2>

Q: まず機能性材料のところ、今のところの1Qから2QのQonQの見方、ディスプレイはもう一段まで上がっていくのか、半導体に関しては、ボトムはどこになるのか、その辺りの感触を教えてくださいませんか。

A: 2Qにつきましては、今確定的なことは当然申し上げられません。傾向でいいますと、足元としては、ディスプレイは先ほど申し上げましたように、昨年の2Qをボトムとして少しずつ回復傾向にあるのかなという感じでございます。

それから半導体につきましては、今のところはまだ状況を見ているということでございますが、恐らく3Q以降回復が始まるのかなと思っておりますけれども、そこはいずれにしましても11月までお待ちください。

Q: 2つ目、農業化学品のラウンドアップとグレースシアのところ。まず、ラウンドアップのところのYOYマイナス14%ということで、先ほども少しお話がありましたけど、全国的に天候不順ということで、2Qは猛暑の影響も含めて、年間の見通しに対して状況はどうなっているのか。あとグレースシアはご説明がありましたように一部前倒しもあったようなので、これも年間の見通しに対してどう見たらいいのかを示唆いただけないでしょうか。

A: まず、ラウンドアップに関しての見通しでございますが、先ほど冒頭に説明がありましたように、5月、6月の天候不順は、5月は非常に大雨で、6月は特に週末がずっと雨だったということが続きまして、ML、ALともに大きく前年割れをした状況にあるということです。

ただ、始まりました2Qの初月、7月に関しましては、これは好天が続きましたので、一定程度回復傾向にあるということで、年間通じては特に心配していない状況でございます。

続きまして、グレーシアに関しましては、先ほど少し前倒しの傾向もあるということでご質問いただきましたけれども、下期・年間を通じまして海外と国内において競合剤の影響は若干ありますが、それも一定程度ということで、決して心配するような状況ではないということでお答えをさせていただきます。

Q：分かりました。そうしましたら、ラウンドアップに関しては、年間YOYプラス6%、グレーシアはプラス37%という会社計画の見通しに関しては、現状今のところ変える必要はないというイメージでよろしいでしょうか。

A：現時点ではそのようにご理解いただきたいと思います。

Q：分かりました。ありがとうございました。

<質問者3>

Q：まずは農業化学品について、29ページのところで、固定費は今回ご計画に対して4億円の増益方向に働いていたかと思えます。具体的にどういったアイテムが上ぶれていて、今後も続いていく余地がありそうなのかを確認させていただきたい。あと、インドのNBRの稼働状況、実際の利益貢献についても教えていただきたい。

また、先ほど国内で値上げ前に買われたことによって流通在庫がたまっていたというお話がありましたが、4-6月期の間に、だいぶそういった在庫ははけていって、今後は特に懸念する必要はなさそうなのか。競合の同業他社の決算などを聞いていますと、インドでも流通在庫が見られたようですが、グレーシアの場合、輸出は比較的インドが多いかと思えますので、グレーシアでインドの流通在庫の調整のような影響は生じていないのか。グレーシアの前倒し分は、金額ベースではどの程度なのか、可能な範囲でご説明いただけますでしょうか。

A：まず、固定費の下ぶれ内訳でございますが、大きく分けますと経費が減少しました。あともう一つ大きいのが農薬関連におけます試験費、これが想定よりかなり下回ったということで、トータル4億円の減という内容になってございます。

2つ目のご質問、NBRの稼働でございますが、これは対外発表も既にしておりますように、本年3月から商業生産を開始いたしまして、2つ目の原体の生産が今月もしくは来月から始まるということで、少し全体の計画としては遅れてございますが、順調に稼働を目指してやっているということでご理解いただければと思います。

3つ目でございます。国内の農薬在庫に関しましては、今の状況を申しますと、6月末の一次流通の在庫は、前年対比でもう既に整理が終わってしまして、前年より在庫率が下がっている状況ということをつかんでいます。一次流通が持っておりました、特に値上げに対する仮需要の在庫が4、5、6月ではけたと我々は見えておりまして、下期あるいは通年に関しましては、在庫の影響はもう出てこないと考えています。

グレーシアの前倒し、これも特に問題なくて、規模としては5億円以下と見てございます。

Q：NBRの稼働の遅れはどれぐらい利益の下ぶれ要因になっているのでしょうか。要因で挙げられなかったのが軽微ですか。

A：今年度に関しましては、その影響としては軽微と見てございます。

Q：分かりました。固定費のうち、経費は具体的にはどういった品目が多いですか。

A：少し細かいですが、広告宣伝費です。この経費が少し後ろにずれた。つまり1Qで出なかったということが若干ございました。あとは、先ほど申し上げたような試験費、ここも数字としては2億円ぐらいの話ですけれども、そういったものが想定よりは支出減になったということになります。

Q：承知しました。ありがとうございます。2点目は半導体材料についてですが、かなり事業環境が厳しくなっていて、3カ月前のお話ですと、韓国のメモリの減産も期初計画には織り込まれていなかったかと思しますので、事業環境は3カ月前の見通しよりも厳しくなっていたかと思します。

そういった中で、EUVのところは上ぶれてきている背景について教えていただきたい。あと、中国向けのところは4Qで出荷が偏ったということだったと思うのですが、1Qはその反動減が出て、2Q以降は正常化していきそうなのか。半導体材料の状況についてあらためてお願いいたします。

A：まず、EUVからお答えします。EUVは韓国顧客で高シェアが維持できていることと、先端に関しては生産量が多く、使用量が多かったといったところで上ぶれになっています。

次に中国の在庫のところですけれども、22年度4Qに在庫を積み増しまして、その後はもう現状ではおおよそ正常化しております。

Q：分かりました。詳細にありがとうございました。

<質問者 4>

Q: 1点目はフルラネルについての質問です。27 ページを拝見しておりますと、ご計画が YoY マイナス 3%に対して、実績マイナス 4%ということなので、誤差のようには見えますが、為替の想定レートが 128 円です。もし何か需要動向に変化があったのであればコメントいただきたいです。一方で、メルク社のブラベクトの 4-6 月期の売上高、ローカルカレンシーベースでプラス 7%ということで好調に見えまして、4-6 月期のブラベクトの販売状況は御社では 2Q に影響すると思いますが、2Q 以降の見通しに関しては、期初のご想定より良さそうなのか。その辺りをご解説いただけますでしょうか。

A: 1Q でいいますと、今おっしゃったように YoY ではマイナス 4%、これは先ほど申し上げましたように若干の減収ということで、金額としては我々から見ると非常に微々たる話になります。これはほぼ計画どおりですので、当社から見ますと全く懸念はしていないということです。

それから、今おっしゃったメルクサイドでの 2Q、すなわち 4-6 月の話ですが、メルク社で開示をされているということですので、その数字に従って、当社の特にロイヤリティについては、それが上ぶれにつながるということになるかと思えます。

Q: ありがとうございます。2点目はディスプレイ材料の競争環境についての質問です。配向膜の同業他社が非公開化される予定ですが、特に半導体材料の競争力強化というところをその会社は強調されておりまして。ディスプレイ材料に関してはあまりハイライトされていないわけですが、何か競争環境に変化が起きる可能性がないかというところを解説いただけますでしょうか。

特に政府系のファンドの傘下に入られるということで、ディスプレイ材料、中国の事業が重要だと思えますけれども、そういったところを含めて御社にとってはプラスになることはあっても、マイナスになることはないように感じますけれども。なかなかコメントいただける点は限られているかもしれませんが、その辺り可能な範囲でご解説いただけますでしょうか。

A: 競合他社様の件に関しましては、現時点においては特に目立った変化はございません。先々のお話ですとか、他社様の今後の動向に関しては、私どもでは把握しかねておりますので、コメントは控えさせていただきます。また、他社様のご判断について、私どもからコメントするのは差し控えますけれども、当社としては特に我々の競争環境、あるいは今後についても、何かマイナスになるようなことはあまり想定されないと考えています。

Q: ありがとうございます。少しその点に絡んでのフォローアップの質問です。半導体材料でも、同じリソグラフィプロセスの重要部材を、御社もその会社も扱っているわけですが、これまでそのレジストメーカーと ARC のすり合わせの部分とかで、これまでどのように関わってこられ

たのか。もしそのレジストメーカーさんの中で業界再編が起こった場合、どういった影響が御社にありそうなのか、これもコメントいただける点は限られていると思いますけれども、可能な範囲でいかがでしょうか。

A：他社さんの判断というところに関してはコメントを差し控えますけれども、現状では特に変わりなく、各レジストメーカー様と一緒にできるところはやっていくという方針で考えております。

Q：ありがとうございました。

<質問者 5>

Q：2点簡単をお願いいたします。1点目は、半導体材料のところ、多層材料のところについて教えていただきたいと思います。1QのYOY4%マイナスのご計画に対しては15%のマイナスということで、下ぶれというところ。どの辺が特に想定と違っていたのか、少し補足いただけないでしょうか。

A：業績予想との想定差ですけれども、韓国メモリの減産が想定より大きかったといったところと、台湾の稼働率減が想定より大きかったといったところが要因になります。

Q：分かりました。2問目は、バランスシート全体のところで、在庫の増加のところについてご説明いただきたいと思います。どのセグメントの在庫が増えているのかという辺りを少しご説明いただけますでしょうか。

A：先ほどバランスシート、10ページでご説明いたしましたけれども、棚卸資産としては3月末対比で69億円増えたということになっております。その内訳としてやはり大きいのは農業化学品の在庫でございます。

ただ、これは中身がかなりはっきりしておりまして、この1Q末のかなり特殊な要因でございまして、当社としてはほとんど懸念をしていないということでございます。

また、22年6月末から見ますと、棚卸資産も150億円強増えておりますけれども、ここにつきましても半分強はやはり農業化学品ということになります。これは、21年から22年にかけて、あるいは今期もそうですけれども、農業化学品自体の売上がかなり伸びているということでございますので、この6月末の一時的なところはそれほど気にならずに、全体としてはマネージできる範囲と考えています。

Q：今の農業化学品の YoY の増加については、当初見込みよりも売上が増えそうだと解釈できますし、下ぶれている結果在庫が多いとも解釈できてしまうのですが、インラインということでしょうか。

A：22年6月末と23年6月末の比較ですから、その在庫は基本的には21年度の売上、あるいは22年度の売上も加味された上での数字になりますので、そういう意味ではその部分の増加は、売上増もかなりあるということ。それから、23年6月末については、先ほど申し上げましたようなスポット的な積み増しがありましたので、そこについてはこれから徐々にはけていくと想定をしておりますので、懸念はそれほどしていないということでもあります。

Q：ありがとうございました。

<質問者 6>

Q：2つお願いいたします。半導体材料のところですが、ARCと多層材料、売上が落としているのですが、販売単価は基本的に維持できているという理解でいいですか。

A：23年1Q実績の YoY で言えば、価格についてはそれぞれ前年対比で ARC、多層材料ともにプラスになっております。

Q：ありがとうございます。2つ目が、化学品のところですが、テピックは売上が大きく落としているのですが、この背景についてあらためてですがコメントいただければと思います。

A：テピックの減収というところですが、中国品の余剰による市況下落といったところが一番大きいところがございます。それと北米向けの顧客、こちらが昨年、物流混乱による結果的な在庫積み増しということになっておりますけれども、そちらはだいぶはけてきたというところがございます。

Q：北米向けのところでは、在庫がはけてきているというのは直近の話ですか。この第1Qまではまだちょっと影響があったということですか。

A：第1Qはまだ影響がありましたが、第2Qの中で少し影響は下がってきているというところになります。

Q：分かりました。ありがとうございました。

以上